

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H01640

研究課題名(和文)イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴーク資料に基づく一神教の宗教史再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of a history of monotheism based upon a discovered synagogue in the Galilee in Israel

研究代表者

市川 裕 (Ichikawa, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・名誉教授

研究者番号：20223084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,500,000円

研究成果の概要(和文)：ガリラヤ地方テル・レヘシュ遺跡の最上層部で出土した簡素な集会所の遺構は、エルサレム神殿が健在だった西暦1世紀半ばに建設され、2世紀後半まで存続したことが推定できたが、同時代の既発見のシナゴークと構造上、酷似していることからシナゴークと同定された。シナゴークと同定する決め手は、その遺跡がユダヤ人の居住地だったことの証明であった。石製品、調理具の蓋、質素なランプなど、穢れに対して極度に敏感な住民の意識はユダヤ法の浸透以外に考えにくい。これらの日常製品とシナゴークの発見は、当時のユダヤ人が日常の物質文化を律法(トーラー)という宗教的規範によって律しようとする意識の高まりに由来することが認められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エルサレム神殿が健在だった西暦1世紀に発するシナゴークの発見はイスラエル全体でも7例しかなく、イエスが活動したガリラヤでは都市マグダラに次いで二例目で、しかもイエスが実際に廻ったガリラヤの小規模集落のシナゴークを想起させるものとして画期的である。また、この時代にシナゴークが建設された理由は、「律法」によって日常生活を律しようとするユダヤ社会の宗教意識の高まりとして理解できるが、これは、ユダヤ社会が啓示法の宗教を発展させる傾向を顕著に示しており、イスラムのシャリーアの先駆としてユダヤ教を捉えることを促す。古代イスラエルの一神教は、ラビ・ユダヤ教とイスラム教という啓示法の宗教の源泉となっている。

研究成果の概要(英文)：A meeting room excavated at Tel-Rekhes of the Galilee in Israel proved to be a synagogue that was probably erected in the middle of the first century C.E., about the same period of the activity of Jesus of Nazareth, and abandoned by the second half of the next century. Similar to those first century C.E. synagogues found so far in Israel, it was a simple room with cut stone seats along the walls. The identification of such a simple room with a synagogue was attested by the fact that most Jews in Judea became so conscious of observing the Jewish divine Law at that time and this narrow site of Galilee was populated by those Jews. We concluded that the construction of a synagogue was part of 'Judaisation' of the Galilee in the sense that Galilean Jewish people began to organize daily life according to the divine precepts: they were very sensitive in abstaining ritual impurity and made use of stone vessels and rids of utensils which would reflect the Mishnaic concepts of ritual purity.

研究分野：宗教学宗教史学

キーワード：古代ユダヤ教 ヘレニズム ローマ都市 シナゴーク エルサレム神殿 儀礼的不浄 新約聖書 タルムード

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2013年から4年計画で採択された基盤研究(A)「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」の成果に立脚して構想された研究である。とりわけ、その最終年で、イエスの活動と同時代、同地域のシナゴグと想定された遺構が、本研究分担者が組織する日本の発掘隊によって発見されたことから、シナゴグの意義を明らかにすることが発見者たちの責務ともなった。

長年にわたるイスラエルとの学术交流のゆえに、現在、日本の発掘隊によってイスラエルでの発掘調査が継続的に行われてきたが、2016年8月に、イスラエル北部ガリラヤ地方の遺跡テル・レヘシュにおいて、科研最終年度に当たり、西暦1世紀のシナゴグと同定できる遺構が発見された。この発見は、この小規模村落がユダヤ人社会であることを確証させた上に、シナゴグの存在は、福音書や歴史家ヨセフスの記述の信憑性を高め、エルサレム第二神殿時代末期に広範囲に及ぶ宗教性の広がりや深まりを想定させ、ユダヤ社会が神殿儀礼の宗教と神の啓示を实践する宗教という両方の要素を備えた宗教として確立されたことを裏付ける証左として無視できない重要性を持つ。

西暦1世紀のシナゴグ遺構は、時代的には、古代ローマ共和政後期・帝政期初期に当たるが、当時のユダヤ社会では、キリスト教が出現し、またローマ帝国との確執からユダヤ戦争が生じた時代である。イエスが活動した北部ガリラヤ地域はユダヤ国家による征服後、さまざまなレヴェルにおける「ユダヤ化」の進展、「宗教による日常生活の規範化」が生じたと考えられた。シナゴグの建設はそうした規範化の一環として理解すべきではないかという期待が高まっていた。



テル・レヘシュ・シナゴグ (2017年8月15日空撮)

2. 研究の目的

本科研基盤研究は、古代ユダヤを例にとって、宗教が日常生活に浸透して宗教的に規範化する様相を明示することである。これを「宗教による日常生活の規範化」と呼ぶことにする。この「日常生活の規範化」がシナゴグ研究を通して概念化できれば、ユダヤ教の「法の宗教」としての性格を、歴史的にも跡付けることができる。それによって、一神教の二つの流れを識別し、

キリスト教とは異なる性格を有する一神教として、ユダヤ教の展開を理解することができる、その先には、「法の宗教」としてラビ・ユダヤ教と共通点を有するイスラム教のシャリーアの特質を明確に概念化することが容易になるであろう。

西暦1世紀のユダヤ社会とシナゴークは、2世紀以後に展開するラビ・ユダヤ教共同体と異邦人キリスト教共同体へと飛躍を遂げる極めて重要な時代と位置付けることができるのであり、シナゴーク・共同体・宗教生活をめぐる既成観念を見直して一神教史の再構築を行うにはふさわしい研究対象となった。

そこから本研究は、この歴史的に重大な変革期における一神教の宗教史的展開を「宗教による日常生活の規範化」の観点から総合的にとらえなおすことを目的とする。具体的には、以下の3つの論点を中心として、成果を提示していく。

(1)シナゴーク遺構の発掘を完了させて、その全体像を明らかにするとともに、集落の住民のどんなニーズに対応したものなのかを考察する。発掘遺物と文献資料を用いて、ガリラヤ地方の住人がユダヤ人なのか、非ユダヤ人なのかを明らかにする。ガリラヤのユダヤ人は、エルサレムやユダ地方のユダヤ人に比べて過激なのか、法規範に厳格だったかなども含む。

(2)エルサレム神殿が存在する時代にシナゴークが作られていることから、両者の関係について考察する。当時のユダヤ人の宗教意識にとって、神殿儀礼と神殿中心の世界観が中心を占めていたと前提したとき、律法による日常生活の規範化という意識は神殿儀礼から派生したものなのか、それとも神殿とは独立した新たな宗教的ニーズなのかを考察する。

(3)萌芽的な関心として、エルサレム神殿の崩壊後、異邦人キリスト教とラビ・ユダヤ教が並行して発展する中で、西暦200年ころ成立したミシュナの歴史的意義に着目して、ローマ法との比較から新たな意義を発見する。

3. 研究の方法

本研究は、通常の発掘調査における考古学的研究、隣接地域の遺跡発掘参加、各地の発掘地踏査による比較研究、歴史学的文献研究、宗教学宗教史的考察等を合わせた学際的総合研究を目指している。とりわけ、長年の学術交流から日本の発掘隊がイスラエルで遺跡調査を行い、発見された西暦1世紀のシナゴーク遺構を総合的歴史研究の中心に据えることができた点は、学術的にみてきわめて幸いである。

当該西暦1~2世紀のイスラエルのガリラヤ地方は、キリスト教の発祥の地であり、またユダヤ人が領土を部分的に再征服してユダヤ化が進んだ地域であることから、発掘地の住民の出自をユダヤ人と前提することはできない。そのため、住民の出自を探る方法論として、宗教的規範の日常生活への影響、あるいは、物質文化自体が宗教規範の拘束を受けるといった観点からの考察が不可欠であった点が特筆に値する。発掘地テル・レヘシュの西暦1~2世紀の住人をユダヤ人と特定するうえで、出土物の持つ特徴が穢れに対する忌避の意識を反映すると解釈されたことは決定的に重要であった。

発掘された遺構は、石灰岩の切り石の座席を四面の壁に沿ってめぐらしただけの矩形の部屋であり、それだけでは単なる集会場でしかない。もちろん、同種類の構造を持つ遺構が西暦1世紀のエルサレム周辺のユダ地方に6~7例すでに発見されていたことから、ユダヤ人のシナゴークと同定できる蓋然性は高い。しかし、住民が誰かが判明しない以上、単なる集会場かもしれないのだ。幸い、ガリラヤ湖西岸のマグダラ遺跡とガリラヤ湖東岸のゴラン地方のガムラでシナゴークと思しき遺構が発見されたことで、当時のガリラヤにユダ地方と同種のシナゴークの存在が証明されたことで、ガリラヤのユダヤ人社会にシナゴーク

が存在したことが前提できるようになっていた。しかし、当該遺跡テル・レヘシュは小規模な集落で、住民の数は都市マグダラとは比べ物にならないほど少人数だから、50人程度収容できる集会場が作られたこと自体も驚きである。住人がユダヤ人であったことがわかることによって、その用途や必要性を理解することができたといえよう。

本研究によって、出土物から住民の出自を推理するという視点、あるいは、物質文化から住人の文化的傾向を認識する新たな視点が生まれた。日常生活の物質文化が宗教規範によって拘束を受けることで生活文化の特徴が明確化する時代になった。これがきっかけで、J・リュプケ氏の「生きられた古代宗教」という研究視点との問題意識が共有できたことにより、新たな研究分野への可能性が開けた。

4. 研究成果

小規模集落におけるシナゴークの存在が実証されることによって、その地域が単にユダヤ人によって居住されるようになったというばかりでなく、日々のユダヤ人の日常生活がどのように特殊ユダヤ教的色彩を帯びるに至ったかを推定することができるようになった。日常生活への「律法主義」の浸透である。

このことは、ユダヤ人の日常生活において、トーラーの教えが浸透していく傾向を顕著に示していると考えることができ、ユダヤ教的視点において、キリスト教の発祥の地ともなったガリラヤの意義を論ずることが可能であり、ラビ・ユダヤ教からイスラムへの啓示法的一神教の発展を宗教史的観点から明確に位置付けることが期待される。

以下に、3つの研究目的に即して成果を詳説する。

(1) テル・レヘシュのシナゴークをめぐる研究

発掘調査やサーベイによって得られた出土物によって、ローマ時代のテル・レヘシュに裕福なユダヤ人が住んでいた可能性が補強された。とりわけ重要な発見となったシナゴーク建造物について、古代の他のシナゴークとの比較の結果、テル・レヘシュのシナゴークが紀元後1世紀に年代づけられることはより確実性を増した。

これまでに発見された紀元後1世紀の都市のシナゴークやユダヤ戦争時のユダヤ軍によって作られたシナゴークなどと比べ、テル・レヘシュのシナゴークは新約聖書においてナザレのイエスが訪れていたとされる村々のシナゴークの姿により近いものと思われる。

ユダヤ教にとってはガリラヤおよびユダヤにおけるシナゴークの最古の事例の1つとして、キリスト教にとってはナザレのイエスの活動場所を具体的に想起させる建物の事例として大きな意義を有するものとなった。

新約聖書、とりわけ共観福音書における「シナゴーク」への言及が、歴史的に見て後代の状況（紀元70年以降、例えばマルコ、マタイの状況）ないしはガリラヤ以外の状況（例えばパウロやルカの前提するヘレニズム諸都市）を、イエス時代のガリラヤへ「投影」したのではなく、正当に歴史的な核を備えた原伝承に由来することが、テル・レヘシュ遺跡におけるシナゴーク跡の発掘から証明された。

ガリラヤにおけるイエス伝承の発祥の少なからぬ部分が、イエスが語ったであろう様々な町村の「シナゴーク」集会という「生活の座」に遡源しうる可能性が想定できた。また、その伝承（口頭）の更なる拡散にもシナゴーク集会が寄与したことが伺え、福音書伝承史のリアルな場が見えるようになった。

(2) 日常生活の宗教規範化

シナゴークが1世紀のユダ地方とガリラヤ地方のお席で7ないし8例発見され、いず

れも、固定した聖櫃、礼拝対象としての神の座を有していない。四壁に沿って石灰岩の切り石の座席を並べた構造は、ここが集会を主要目的とした施設であることを示す。

神殿との関係に着目して歴史的変遷も加味してシナゴークを 2 つに類型化すると、西暦 1 世紀のシナゴークは「神殿との併存としてのシナゴーク」であるが、3 世紀以降、ガリラヤの固定した「アロン・コデシュ聖櫃」を備えたシナゴークは、「神殿の代替物としてのシナゴーク」である。前者が 1 世紀になってイスラエル地方で発見されたことから、シナゴーク建設は、決してバビロン捕囚前後の昔から存在したのではなく、日常生活の律法規範化と何らかの関係があるものと想定される。

日常生活の規範化の特徴は、パリサイ派が固執した 2 つの規定、穢れの類型化と浄化法の実行とイスラエルの地の産物から十分の一税の厳格に取り分けることは、すでによく知られた内容だが、発掘で見られる石灰石性のメジャリング・カップやエルサレム方面から持ち込まれた陶器類、ランプなどから、穢れに対する厳格な意識がユダヤ社会の物質文化を特徴づけるまでになっていることが実証された。

穢れに対するラビたちの観念やユダヤ教の規範との関連を実証するのが土器資料、とりわけ食に関する食器・調理器の「フタ」の重要性の発見である。フタ資料はミシュナの記述からユダヤ民族の日常生活においてその規範化を考えるうえで大変重要な資料だが、考古学者はこれまでフタを器の付属品程度としかとらえてこなかったため、発掘現場における出土土器分類の際に、フタの出土が想定されておらず、仮に出土しても小水差しの下部、皿、鉢等に分類されてしまうことがしばしばである。このことを指摘できた。フタを見分けるうえでどのような点に注意すべきかを具体的な指標として示し、またフタ単体で見るのではなく身との関係性に注目することが最重要。

神殿が穢れを嫌うことは通文化的に確認されるとしても、ユダヤ社会では、神殿供犠は祭司とレビ人の回想の特権であり、一般のユダヤ人とは深い関わりはなかった。では、いつからパリサイ派や死海教団において一般のユダヤ人の日常生活へも穢れの意識が浸透するのか。本科研では、神殿改革において、一般のユダヤ人が日々といけにえに立ち会うことを義務付ける法解釈が実施されたことにその主要な原因を見出した。これは、また歴史的には、ユダヤがハスモン朝で独立して先祖の土地を再征服する過程で生じた聖地観念とも関係すると解釈される。

(3) ローマ法とユダヤ法との関係。

2019 年 9 月のシンポジウムを通して、J・リュプケ氏の「生きられた古代宗教」の視点からの研究成果に触発されて、「宗教と法」の既成概念への挑戦の意味合いを込めた構想を立てることができた。リュプケ氏は、研究の重要な要素として、都市化、宗教的仲介者、法規範の制定を挙げた。これらの要素は、ユダヤ教において西暦 200 年ころに編纂された口伝トーラー「ミシュナ」の成立をめぐる時代状況と符合することに本研究代表者は大きなヒントを得た。これは令和 2 年度科学研究費基盤研究(A)「生きられた古代宗教の視点による古代ユダヤ変革期東地中海世界の総合的宗教史構築」研究代表者市川裕に引き継がれる。詳細は、研究計画調書参照。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 7件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 市川裕	4. 巻 389
2. 論文標題 ユダヤ教の経済観念 正しい道理の富	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 27-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 I C H I K A W A Hiroshi	4. 巻 23
2. 論文標題 Prospects of Japanese Translation of the Babylonian Talmud	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ParDeS(Universitätsverlag Potsdam)	6. 最初と最後の頁 183-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 ICHIKAWA Hiroshi	4. 巻 ISSN 2186-5175, CISMOR
2. 論文標題 Talmudic Discussion in Japanese: On the Possibility of Cultural Innovation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Judaism and Japanese Culture: Studies in Honor of Joel Hoffmann, The 9th CISMOR Annual Conference on Jewish Studies, November 27,28 ,2016	6. 最初と最後の頁 162-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 市川裕	4. 巻 91巻別冊（電子出版）
2. 論文標題 イスラエル、ガリラヤ地方の新出土シナゴークの宗教史的意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 259 260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桑原久男・橋本英将	4. 巻 141
2. 論文標題 聖書考古学の最前線 - イスラエル、エン・ゲヴ遺跡とレヘシュ遺跡 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 66-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原久男・山野貴彦・津本英利	4. 巻 特集号
2. 論文標題 ガリラヤ最初期のシナゴークを掘る - イスラエル刻テル・レヘシュ遺跡第11次発掘調査 (2017年) -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『第25回西アジア発掘調査報告会報告集 - 平成29年度 考古学が語る古代オリエント - 』日本西アジア考古学会	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hisao Kuwabara and Yitzhak Paz	4. 巻 130
2. 論文標題 Tel Rekhesh 2015: Preliminary Report	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hadashot Arkheologiyot (http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=25387&mag_id=126)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 長谷川修一	4. 巻 141
2. 論文標題 聖書考古学の現在	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江添誠	4. 巻 11
2. 論文標題 ガダラで造幣されたコインにみるフェニキアの影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化遺産学研究	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 50
2. 論文標題 古代ユダヤ教の贖罪儀礼と悔い改め 心の内と儀礼	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 聖書学論集	6. 最初と最後の頁 23 - 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 33
2. 論文標題 <シンポジウム 古代後期のユダヤ教研究の諸相> 解題、および、一神教の二つの流れとその歴史的源流	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛西康德	4. 巻 51
2. 論文標題 古代ギリシア教に改宗することはできるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史友	6. 最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原久男・山野貴彦・津本英利	4. 巻 1
2. 論文標題 ガリラヤ地方最初期のシナゴークを掘る - イスラエル国テル・レヘシュ第11次発掘調査 (2017年) -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『平成29年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会	6. 最初と最後の頁 49-52頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mordechai Aviam, Hisao Kuwabara, Shuichi Hasegawa and Yitzhak Paz	4. 巻 46
2. 論文標題 A 1st & 2nd Century CE Assembly Room (Synagogue?) in a Jewish Estate at Tel Rekhesh, Lower Galilee	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Tel Aviv	6. 最初と最後の頁 128-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03344355.2019.1587227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hisao Kuwabara and Yitzhak Paz	4. 巻 130
2. 論文標題 Tel Rekhesh 2015: Preliminary Report	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hadashot Arkheologiyot , http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=25387&mag_id=126	6. 最初と最後の頁 web出版
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hisao Kuwabara and Yitzhak Paz	4. 巻 131
2. 論文標題 Tel Rekhesh 2016: Preliminary Report	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Hadashot Arkheologiyot , https://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=25534&mag_id=127	6. 最初と最後の頁 web出版
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 牧野久実	4. 巻 20
2. 論文標題 パレスティナから出土したヘレニズム・ローマ時代のフタ 特に身との関係から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西アジア考古学	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村静	4. 巻 33
2. 論文標題 クムランと死海文書 神殿時代末期のユダヤ社会の同時代史的視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村静	4. 巻 978-4-86376-078-3
2. 論文標題 第2神殿時代におけるガリラヤのリーダーたち ユダヤ性への問い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 勝又・柴田・志田・高井 (編) 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集 』(リトン	6. 最初と最後の頁 163-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝又悦子	4. 巻 978-4-86376-078-3
2. 論文標題 「民」と「自由」と「偶像崇拜」 出エジプト記ラッパ41章を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 勝又・柴田・志田・高井 (編) 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集 』(リトン	6. 最初と最後の頁 273-299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KATSUMATA Etsuko	4. 巻 14
2. 論文標題 Toward Investigation of Democracy in Jewish Thought: Freedom, Equality, and Dimos in the Rabbinic Literature	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of the Interdisciplinary Studies of Monotheistic Religion, Doshisha University	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土居由美	4. 巻 978-4-86376-078-3
2. 論文標題 ユダヤ教からキリスト教へ 異教世界と接して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 勝又・柴田・志田・高井 (編) 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集 』(リトン)	6. 最初と最後の頁 189-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西恭子	4. 巻 978-4-86376-078-3
2. 論文標題 アウグスティヌス「神の国」における「地上の国の宗教」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 勝又・柴田・志田・高井 (編) 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集 』(リトン)	6. 最初と最後の頁 221-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 EZOE Makoto	4. 巻 12
2. 論文標題 The Coins Catalogue in Gadara-Umm Qais	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化遺産学研究	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江添誠	4. 巻 54(2)
2. 論文標題 考古資料からみる第一次ユダヤ戦争のガリラヤ攻防における戦闘状況	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 38-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋田英晴	4. 巻 978-4-86376-078-3
2. 論文標題 中世イスラーム世界のユダヤ社会における教育と波紋の機能について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 勝又・柴田・志田・高井 (編) 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集』 (リトン)	6. 最初と最後の頁 301-317
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山野貴彦	4. 巻 49
2. 論文標題 テル・レヘシュ・シナゴーク	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本聖書学研究所編 『聖書学論集』	6. 最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山野貴彦	4. 巻 1
2. 論文標題 紀元後1世紀のガリラヤ・サマリア・ユダヤにおける住居の形態 テル・レヘシュの事例研究に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本新約学会編 『イエスから初期キリスト教へ新約思想とその展開』 (青野太潮先生献呈論文集)、リトン社	6. 最初と最後の頁 369-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 イスラエル、ガリラヤ地方の新出土シナゴグの宗教史的意義
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 ユダヤ教の法と伝承 タルムードはなにを議論しているのか
3. 学会等名 日本オリエント学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 江添誠
2. 発表標題 ティルスとガダラ ～トランス・ヨルダン地域におけるフェニキアの表出～
3. 学会等名 日本オリエント学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧野久実
2. 発表標題 パレスティナから出土したヘレニズム・ローマ時代のフタ 型式分類と編年の構築に向けて Typology and Chronology of Lids from the Hellenistic and Roman Periods in Palestine
3. 学会等名 日本西アジア考古学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 What is Lived "Halakhic Religion" ?
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会開催校企画パネル
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Joerg Riepke
2. 発表標題 The Concept of "Lived Ancient Religion"
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会開催校企画パネル 2 0 1 9
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西恭子
2. 発表標題 Making of the Concept of "Paganism" in the Later Roman Empire
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会開催校企画パネル 2 0 1 9
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土居由美
2. 発表標題 Difference in Way of Living in "History Religion"
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会開催校企画パネル 2 0 1 9
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ICHIKAWA Hiroshi
2. 発表標題 The Historical Significance of A Newly Discovered Synagogue in the Galilee, Israel
3. 学会等名 The XIth Congress of the European Association for Jewish Studies, Krakow, Poland (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HASEGAWA Shuichi, H. Hashimoto, H. Tsumoto and T. Onozuka
2. 発表標題 The Excavations at Tel Rekhesh, Israel: The Results of 2013-2017 Seasons
3. 学会等名 The 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East in Munich (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HASEGAWA Shuichi
2. 発表標題 Hopper-rubber mills in the eastern Mediterranean and its historical implications
3. 学会等名 EAA Annual Congress 2018 (European Association of Archaeologists) (University of Barcelona, Barcelona)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村 静
2. 発表標題 クムランと死海文書：神殿時代末期のユダヤ社会の同時代的視点から
3. 学会等名 日本ユダヤ学会シンポジウム「古代後期のユダヤ教研究の諸相：3つの視点から」（於学習院女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中西恭子
2. 発表標題 ローマ敵国の「キリスト教化」とユダヤ教
3. 学会等名 日本ユダヤ学会シンポジウム「古代後期のユダヤ教研究の諸相：3つの視点から」（於学習院女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 一神教の二つの流れとその歴史的源流
3. 学会等名 日本ユダヤ学会シンポジウム「古代後期のユダヤ教研究の諸相：3つの視点から」（於学習院女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MAKINO Kumi
2. 発表標題 Study of lids in Palestine during the Hellenistic and Roman periods- Through the ancient 's potter 's view
3. 学会等名 24th European Association of Archaeologists, Annual Congress, Barcelona, Spain2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MAKINO Kumi
2. 発表標題 Development of a unified database of ancient pottery fragments
3. 学会等名 25th European Association of Archaeologists, Annual Congress, Bern, Switzerland2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 牧野久実
2. 発表標題 ヘレニズム・ローマ時代のフタ パレスティナ北部ガリラヤ地域の状況
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第23回総大会2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江添誠
2. 発表標題 出土遺物に何を問いかけ、何を語らせるか？
3. 学会等名 日本西洋史学会 第68回大会 小シンポジウム2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 牧野久実、江添誠、ミハエル・アイゼンベルグ
2. 発表標題 ヘレニズム時代のエン・ゲヴ遺跡とヒッポス遺跡
3. 学会等名 日本西アジア考古学会大会ポスター発表
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 細田あや子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 356
3. 書名 生と死と祈りの美術	

1. 著者名 市川裕	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 189
3. 書名 ユダヤ人とユダヤ教	

1. 著者名 勝又・柴田・志田・高井（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 （リトン）	5. 総ページ数 423
3. 書名 『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究 http://www.l.u-tokyo.ac.jp/ichikawakaken/index.html テル・レヘシュ調査日記（テル・レヘシュ発掘調査団による公式ブログ） http://rekhesh.sblo.jp</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 研 (SATO Migaku) (00187238)	立教大学・名誉教授・名誉教授 (32686)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桑原 久男 (KUWABARA Hisao) (00234633)	天理大学・文学部・教授 (34602)	
研究分担者	細田 あや子 (HOSODA Ayako) (00323949)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	上村 静 (UEMURA Shizuka) (00447319)	尚綱学院大学・総合人間科学系・教授 (31311)	
研究分担者	高井 啓介 (TAKAI Keisuke) (00573453)	関東学院大学・国際文化学部・准教授 (32704)	
研究分担者	月本 昭男 (TSUKIMOTO Akio) (10147928)	上智大学・神学部・教授 (32621)	
研究分担者	土居 由美 (DOI Yumi) (50751038)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員 (12601)	
研究分担者	勝又 悦子 (MATSUMATA Etsuko) (60399045)	同志社大学・神学部・准教授 (34310)	
研究分担者	長谷川 修一 (HASEGAWA Shuichi) (70624609)	立教大学・文学部・准教授 (32686)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	葛西 康德 (KASAI Yasunori) (80114437)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	江添 誠 (EZOE Makoto) (80610287)	神奈川大学・外国語学部・講師 (32702)	
研究分担者	牧野 久実 (MAKINO Kumi) (90212208)	鎌倉女子大学・教育学部・教授 (32705)	
研究分担者	高久 恭子（中西恭子） (TAKAKU Kyoko) (90626590)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員 (12601)	
研究協力者	嶋田 英晴 (SHIMADA Hideharu)		
研究協力者	山野 貴彦 (YAMANO Takahiko)		